



こしき島

舟唄

高橋 悠

最近、私はグリー・クラブの演奏会に出席する機会を得た。私のゼミナールの四人の学生たちが招待してくれたからである。彼等の力演する姿を見、かつその歌声を満喫しつつ、私は、それとは別に、特別の感慨に誘われた。というのは、当日の曲目の中に、同志社カレッジ・ソングとこしき島舟唄とが含まれていたからである。

一昨年の秋、私はハーヴァード大学グリー・クラブの発表会に出席した。そこで私は、思いがけなくも、この二つの歌を聴いたのである。その年の夏、彼等が日本を訪れた時に、同志社大学のグリー・クラブから教えられた歌であるという指揮者の説明つきで演奏されたこれらの歌がすでに一年半近く日本を離れていた私の気持の中にひき起こした感動を私はいまでも明らかに思い出すことができる。ことに後者は日本語の歌詞と純日本的なメロディの故に、一層印象深かったことを覚えている。

米国ニュー・イングランド地方で歌われたこの歌を聴いて、私は、当然のことながら、同志社のことを連想した。あの地方に根づ

いた新しいキリスト教の精神を汲みとってこの学校が設立されたことの意味、そして現在の同志社の姿などが必然的に私の脳裏に浮かび、その発表会のあとしばらくはそれらのことについていろいろと考えさせられた。その一端をいまここに述べてみたいと思う。

就職試験が早くなったとかで学生諸君は夏休み前から忙しくそのために走り廻っているが、この就職ということに関して、同志社の出身者は会社で評判が悪くないと聞く。理由は、要するに、まじめで協調性に富むということであるらしい。たしかに、私が親しく接触した限りにおいて、彼等は誠実で、よく自己を知り、他人を傷つけない配慮をすることができ。もちろん、これと同時に、積極的に勉強しないという批判もある。しかし私はこの後の問題を追及しようとは思わない。こういうものは設備を整えることによって改善し得る性質のものである。広大な読書室といつでも利用できる豊富な参考書類とが与えられ、そして読むべき書物が毎週教授によって十分に指定されるならば、誰でも勉強するようになるに違いない。米国の大学におけるやり方がそれである。これを誰かが高等学校の教育のようだと批評しているのを聞いたが、私はそうは思わない。大学は、専門の分野において、自己を存分に鍛錬する場と適切な援助とを提供すべきであると思ふ。だから私はこの問題については樂觀的である。しかし、前の問題、つまり社会道徳の涵養ということはこれとはかなり違った性質を持っている。このためにも環境の整備はもちろん必要である。しかし、このことはどのような環境にあっても不可欠なものであり、また実現可能なものであると私は

思う。そして日本においては同志社がそれを他に比してよりよく実現して来ており、また将来においてもその中心となるべきだと思ふ。その意味において、同志社の学生の持つ前記の特色は重視されるべき性質を有する。

米國で得た私の経験をふり返つてみて、もつとも強く印象に残っているのは社会の隅々にまで浸透した日常的社會道德の普及ということである。例えば、バス・電車の乗降、マーケット、郵便局その他での買物の際に、彼等は他人を追越すことを極度に警戒する。列を作つていて前の人を無視するということがない。私はお前の方が先だといつて注意されたことが何度かある。また彼等は、そういう場合に、他人の体に接触しないように細心の注意を払う。押すなどということではなく、触れることに注意するのである。さらに、ドアは必ず後続者に渡し、入口で会えば先を譲り、人が歩けば必ず自動車が進まる等々である。こういったことが日常無数にかつ確実に繰り返されている。他方、動植物の愛護も、しばしば新聞紙上などに紹介されている通り、徹底している。それは単にいじめないというような消極的なものではなく、より積極的である。米國の大學を訪れた人は誰でも見かける風景であるが、キャンパス内の芝生で休息する学生のそばにリスが寄つて来ると彼等はそれを貴重品のやうに扱い、息を殺して驚かさないようにする。積極的なのは出て来て食物を要求することもあるほど人を恐れない。路傍でおばあさんがピーナッツを一つずつ与えて、飽きもしないで食べるのを見ていることもある。動物に食物を与えることといえば、鳩のためにパン屑を撒いている老婦人にもよく出会った。冬の氷に閉ざされた公

園に毎朝撒かれているのも見た。また寒い冬、家の前の木の枝に小さな水入れが小鳥のために吊してある風景にも接したことがある。すべてこれらのことは、私が最初に行ったテキサス州のダラスという町およびその周辺においても、また、ダラスから北上する自動車旅行の途中においても、さらにワシントン、シカゴ、ニューヨーク、ボストン等の大都會においても、帰途に暫らく滞在したオランダにおいても、共通に存在する現象であつた。

ところが、日本ではそうはいかない。列を作つていて前の人よりも先になることなどは悪いことというよりもむしろ当然のことと考えられているような錯覚を起こすほどである。押すことに至つては論外である。そしてもつとひどいのはそういう時に注意をした人がなぐられたり傷つけられたりするという事実である。これと対照的なのは、私自身は目撃しなかつたけれども、ボストンの地下鉄で、婦人を押しのけて乗車した青年が赤面して怒つた当の婦人に突き飛ばされたという事実である。この問題についてはかなり不感症になつている私もドアの開閉については遺憾に思うことが多い。ドアといつてもバネのついたもののであるが、百貨店やホテルなどで後の人のために手で支えていると、平然として手を出さずに通り過ぎる人がいる。また、避けて別のドアから入つた人もある。善意に解釈すればこういう人は他人が自分のためにそんな行為をする筈がないと思つているのかもしれない。しかし、逆に後を確かめないで手を離す人が多いことを見れば、そうとも言い切れないのである。そのために子供が頭を打つたこともある。日本では動植物もまた恵まれていない。投石されたり殺されたり折られたりすることは少

なくなつたのかもしれないが、最近私の家の近所で死んだ犬は病気になつてから捨犬同様の扱いを受けて放浪していたことや、多くの犬が放し飼いされていることを考えると、動物に対する愛情が深いとは思えない。犬を勝手に歩き廻らせることは、他人に迷惑をかけるばかりではなく、犬を家族の一員と考えている人には出来ないことだと私は思う。要するにそれらは生命軽視の觀念の現われである。

このような態度が国の政治にも現われるのは当然である。日本の工業の發展とか經濟成長率とか防衛とかいふ問題が派手に取り扱われている反面、下水道と道路の改修は遅々として進まない。原始的な便所を抱え、排水の悪い溝と雨が降れば穴だらけになる道とを前にして、どれだけ多くの家が建ち並んでいることだろう。その道を雨の日には泥水を、晴れた日には埃を撒き散らしてたくさん自動車が通る。そして人は穴を埋めるために置かれた大きな砂利に足をとられながら覚束なく歩くのである。日本は、戦後、驚異的な復興を遂げたと言われているが、それはこういった不十分な基礎の上に建てられたものであることを忘れないようにしたい。これを作り直すことは大事業である。それは經濟的な意味においてのみならず、精神的にもそうである。個人の生活を尊重するという態度の普及を計らない限り、我れ我れの国はいつまでも暗く冷たく不健康な土台の上に立つて、またしても非人間的な社会構成と一部の利益とを追及することになつてしまひそうである。日本が欧米諸国の水準に近づいたというような考え方を私は敢えて危険な幻影であると言いたい。技術的な面においてはそうかもしれないが、そういうものの価値は終局的にはそれがどのような形で我れ我れの生活に吸収され消化され

ているかということによつて計られるべきである。そして、彼等の基礎はすでに一応完成している。我れ我れのはまだこれからである。

こういうことを言えば、東洋と西洋との違いということを用ひして反駁されるかもしれない。事実、米国で会つた韓国人や中国人や中東人の中にはよくそれを口にしてゐた人があつたのである。そして彼等の議論は常に過去の繁榮の回顧や東洋における人情の厚さということを中心として展開されていた。しかし問題は人情の範圍であり、また古来の美風と現在の生活とを如何に調和させるかということである。親族間、友人間に厚くてもそれ以上には及ばない人情を贊美してみても問題は解決しない。またそれが現在どれほどの純粹性を保っているかも疑わしい。そんなことにはなくて、もっと視野を広げなければならない。私の專攻は國際法であるが、國際法の基本的前提が共通の人間性であることは昔から説かれている。私自身も、海外における經驗を通じて、とくにダラスのサザン・メソジスト大学の寄宿舎における世界各国人——欧米、中東、中南米、アジアからの人々——との共同生活を通じて、それを確認することができたと思つている。国境を越えた人間性というものは確かに存在する。一緒に生活すれば国籍や人種などというものは忘れてしまうものである。最近私はそのグループの中の二人——一人はスイス人他はイラン人——の訪問を受けたが、日本で会つて話してみても、そのことを再確認した次第である。このことに関して、ワシントンで会つた米国國際法学会の長老フエンウィック博士は國際法學者の使命は人間の共通の善意を伸ばすことであると言つて私を励まされたのであるが、私はこの言葉の單純ではあるが深い眞実性を疑わない。

善意によって結ばれた人間関係を開発するためには、しかし、努力が必要である。しかもそれは国家の政策という形で与えられるべきものではない。また、ある特定の政治的目的と結びつけられるべきでもない。それは我れ我れの日常生活から生まれるべきものであると私は思う。その意味で、最近展開されている「小さな親切」運動に私は大きな期待を持っている。この種の方法が我れ我れの社会の基礎を固めるためにとられるべきだと私は考える。しかしそれが同志社から始まったものでないことは残念である。というのは、同志社の大きな特色はこの点にあると私は理解しているからである。その創立以来、同志社には、欧米においてすでに確立されている基礎社会を日本において開発すべき任務が課されている。我れ我れはだから、小さな親切と迷惑防止のための運動を対外的に積極的に推進すべきである。しかし、それと同時に、学内における人間造りの方法についても、もう一度よく考えてみる必要があるではないか。そのための条件としては、實際上多くの障害があるとしても、一応、いくつかのことを思い浮かべることができる。例えば学生数の制限、一貫教育の徹底、全寮制度の設立等々である。いずれも質的にすぐれた人材を養成するために望ましい条件ではあるが、しかし一番大切なことはそういう気風が同志社の内部にいまよりももっと強く充満することであろう。それにはどうすればよいのかということを、私は来国にいる時にも考えたり、帰って来てからも考えているけれど、具体的な名案は浮かばない。最近グリー・クラブの歌を聴いてまたそのことが気にかかっている次第である。

(法学部教授・国際法)

昭和39年度 同志社大学入学試験案内

(1) 入学試験科目

○神・文・法・経済・商学部は「英語」「国語(甲)」の二科目および「社会(日本史・世界史・人文地理・社会)」「数学」「理科(生物)」の三教科系列六科目のうちいずれか一科目の計三科目。

○工学部は「英語」「物理」「化学」「数学」の四科目。

※数学について

①文科系学部の数学は科目に細分しない。試験範囲は数Ⅰおよび数Ⅱとする。(文部省通達(B)のⅠ)

②工学部の数学は科目に細分しない。試験範囲は数Ⅰ、数Ⅱおよび数Ⅲとする。(文部省通達(A))

(2) 入学試験日 昭和39年2月23日(日)、24日(月)、25日(火)

○京都試験場 2月23日 文学部 法学部

2月24日 商学部 工学部

2月25日 神学部 経済学部

○地方試験場 京都試験場と同じ

※右の通り二学部宛三段階の試験を行う。

入試日の異なる学部の併願は差支えない。

(3) 試験場所

○京都 同志社大学

○地方 東京・札幌・名古屋・広島・高松・福岡の予定



内村 鑑三

内村鑑三と 植村正久の 同志社評

清水安三

内村は新島先生とは同郷（前者は高崎藩、後者は安中藩で共に上州の出身）の誼みがあつたばかりでなく、内村は渡米留学の際にも並々ならぬ尽力を新島先生に請うている。そのことは内村が先生に書き送った英文の書簡によつてもよく証されている。そうした親交の關係にあつたにもかかわらず、あるいはまた、そうした關係であつたからであらうか、内村は、相当、酷評を同志社に向かつて浴びせかけている。

「俗と神とに併び事へんとせし同志社の今日の非運に迫りしは決して怪むに足らず、同志社は多くのユニテリアンを出し、外国商館の番頭と相場師と、銀行社員と会社員と婦女的伝道師と、策略に富める宗教家と新聞記者とを作れり。一方に於ては米國基督教信徒の淨財を仰ぐかと思へば、他の方に於ては故後藤象次郎等の穢財を乞ひ、以て精神的教育を我國子弟の上に施さんと試みたり。」

基督教の聖書に曰く「樹は其实を以て知らる」と、同志社の真相は之を探り識るに難からず」

「余輩は同志社の終に滅亡に帰するを予言して憚らず、嚮に仙台なる東華学校は同一の手段に依て起されたり、而して其憫むべき滅亡は十数年前にありき。同一の原因は同一の結果を來たす。大なる同志社は小なる東華学校の跡を逐ひつゝあり。…（中略）…同志社は其奉ずると称する基督教の主義を奉ぜざりき。而して其結果たるや外に對しては日本の名譽と信用とを毀損し、内に對しては基督教の進歩に大打撃を加へたり…」（東京獨立雜誌・一八九九年一月）

とまで極論している。かつて國際基督教大學開校式の席上で、當時、東大総長だつた矢内原博士は日本の生んだ予言者内村鑑三先生云々等と、タイトルを付して、博士が平素崇拜喝仰して措かれなかつた内村の言をお引きになつた。内村先生が予言者であつたか否かはともかくとして、少なくとも同志社に関して叫ばれた予言ばかりは、全く的中しなかつたことになる。なぜならば同志社は、その後ますます盛大になつて、今日の如きマンモスの一大學園にまで成長しているからである。

ではどうして内村先生の予言が当たらなかつたかと言うに、たとえそれがユニテリアンの如きもつともリベラルな信仰であつたにもせよ、また、ほんのからし種ほどの信仰であつても、信仰をいだいて未だ見ざる所をまことと信じつつ、建設する限り、その學園は遂には盛大になるものであることを、さすがの内村先生も知らなかつたからである。唯に同志社ばかりではなく、かの目白の日本女子大

学の如きもなかなか盛かんである。創立者成瀬仁蔵先生の如きは自ら婦一協会のチャーター・メンバーとまでなつて、ユニテリアンたることを自称していられたではないか。それからこの桜美林学園の如きはまだ海の物とも山の物とも見当のつかぬ物ではあるが、極めてリベラルな信仰の持ち主であるにもかかわらず、同志社マン清水安三が結構盛かんにやっているのである。

次は植村正久であるが、一八九七年九月福音新報において、

「余輩は新島襄氏を敬するものなりと雖も、或る一流の人々が称道する程に偉大なる人物なりしと信する能はず。故に同志社の精神的衰退を一に新島氏の死に被帰すること能はざるなり。加之、余輩は更に一步を進めて同志社今日の非運は新島氏等其の俑を作りしに由ると断言せんと欲す。新島氏は血性の日本男児にして、之に多少の基督教的要素を加味せしものなり。功業の念熾んにして、常に其志を遂ぐるに熱心し、頻りに之を苦慮する結果、巧に



植村 正久

外人とも結托し、日本の非基督教徒とも相提携し、異主義者異分子を操縦して其目的を達せんと試みたり。之がために内外の間に行き違ひを生ずるの種を蒔かれ、将来の禍根となるべき一種の情実も生じ、純然たる基督教主義に非らざる勢力も侵入したるらん……」

と書き立てている。また同年の九月にも同じく福音新報紙にて、「再び同志社に就て」と題して「余輩の言ふ所をして誤りなからしめば、同志社今日の地位は背徳を極め、内外に向つて信義を蹂躪し日本基督教徒の体面を汚し、延いて国際の友誼をも破り、基督の精神に悖戻したるものと謂はざるべからず、余輩は名を基督教徒の内に置く輩にして、斯くの如きことあるに至れるを悲しむ」とまで極言している。

一体どうして植村正久はかくの如くに、新島先生と同志社をこつびどく批評するにいたつたかと言うに、それには少なくとも二つの理由があつたであろうと考えられる。その一つはライバル意識であつた。イエス・キリストすらもとの宗教的ライバルのパリサイ派、サドカイ派、熱心党などにさんざん迫害された。強いて言えばイエスを十字架にかけた下手人はローマ人であつたが、ライバルの宗教家こそがその本當の殺し屋だったのである。当時、組合派と日基派とは、しょせん、すごいライバル根性を互いに燃やしていたものである。今一つの理由は新島先生が宗派合同のことを極力反対せられたがためである。教派合併を流産、中絶せしめたのは新島先生その人だつたから、合同論者だつた植村正久をして、それこそ腹のドン底から憤慨せしめるに至つたのである。新島先生はと言えば「同志社教会が若し合併に賛成せば、自分は同志社を棄てて、北海道に行つて第二の同志社を建てる」とまで、絶叫せられるくらい合併反対者であつたのである。多分そうしたことが植村をしてかくの如き評論をもつせしめるに至つたのであろう。

植村正久の新島先生に対する批判は、なおそれだけではなく、先

生の桑の木のステッキも折れ、鮮血の流れたところの例の自己懲罰のご行為でさえ、あれは米国で実際に行なわれたところの何某という校長先生の行為、行動の再演出の焼き直しであるとして、その文獻すら挙げて批判し、擲論、攻撃にまで及んでいる。金森通倫の基督教三綱領には、基督の十字架そのものを、新島先生の自己懲罰、桑のステッキのご行為に依つて解説してさえあるのに、植村の批判はまことに思い切つたものであった。

植村の新島裏論は一九〇三年八月の福音新報に載っている。今その文章を抄写するならば、

「新島裏は我国基督教信者に非常に尊崇されて居った。彼は基督教徒以外の人々からも稀有の傑物と認められた。或者は福沢氏と並べ称して、東西の二大教育者と呼んだ。彼が死後一部の基督教徒は之を崇拜して止まない。此の人去つて基督教振はずと思ふものもあるらしく見える。

もし人から偉く思はれるが英雄たる資格の一つであるならば、新島は確かに其一人たるを失ふまい。然し、此の名声が一時の際物相場で無かつたかと云ふ疑問もある。彼が死後十有余年を経た今日、冷静公平に之を論評すべき機会が熟しつつある。たとひ之を議論せずとも事実上判決は早晚新島の真価如何を明かにするであらう。

記者（植村）等の記憶する所に依れば、第一何所となく上品で風采の好い人であつた。……第二彼は熱情の人であつた。……第三新島は学識に富んで居らなかつた。経綸の技倆も左程には無い。……其の雄弁は男性的で無く、寧ろ女性的であつた。蓋し其の雄

弁の特徴が新島の全部を掩ふものであるかと思はれる。……第四新島は其出身や経歴と言ひ、人物と言ひ、日本基督教開拓のパウロ若くばヨハネであり得たのであるが、惜哉彼をして其天分を充分に發揮することを得ざらしめた事情がある。彼は神を信じ基督を愛したに違ひ無い、彼は伝道の熱情をもつて居った。然し彼は余り己の事業を偶像としたのである。其の計劃と事業とは彼を束縛して靈的發展にも幾分か害を及ぼし、日本教化の頭領として其の天職を全ふすることを得ざらしめた。……鹿を逐ふ者山を見ず、新島裏は余りに多く一種のアムビションに駆られた所から頭領此の莊園に乗り入れ、宛も輕舟が阿波の鳴戸に巻き込れた時分見た様に進退維れ谷まつたのである。……新島は日本伝道の大予言者たるべき人が、洗礼を受けた企業的豪傑として畢つたのである。……彼の死を早めたのも此の難関に悶躁いた結果ではあるまいか。我輩の見る所を以てすれば、日本に於ける基督教の進路に横たはる最も恐る可き誘惑は此点に存すると言はねばならぬ。小さな新島が多く出来て、続々失敗するを見よ」云々と。

今もなお内村鑑三全集は版を新にし、植村全集は再刻されているのであるが、これ等の文獻が後世に伝える新島裏論なるものに、唯一つよく對抗して、真実の新島先生を世にアカシするものがあるならば、わたくしはそれは実に実存の同志社そのものであると考えるのである。

一九〇三年九月、福音新報の植村が自ら綴つた文章の中に「本紙（福音新報のこと）に新島裏に関する文章が出た所、其の反響が諸方に起つて、泣くものもあり、怒るものも出て来た。死後十有余年

を経た今日尚ほ斯くの如くであるを見れば、新島が生前の人望と勢力が大きかったことを知るに足る」と報じている。内村、植村の両村が新島先生と同志社とに対して如何に野次を飛ばしたからとて、我れ我れは別に泣いたり怒ったり騒いだりする要はないのであるが、断じて同志社マンが身を以て世にアカシすべきことは、内村、植村の両村の同志社論、新島観が後世から考えて実にコッケイなるものでしかなかったことを実証すべきであると、わたくしは考へる。

すなわち今日、日本の基督教会はキョウダンなる名称の下に合併しているのであるが、近時、多少にても心ある者はやはりむかしの如くに、日基、メソジスト、組合、バプテスト、ホーリネスと言うふうに、別世帯で各自その特長を發揮し、善い意味に於けるライバル意識をもって、神の国を攻め取らんとして互いに競つた時代の方がマシであつたと考えるに至っている。已に死せる植村を中心に置いて尊崇している旧日基の半ばは、再びセバレストして一宗派を打ち建てているし、バプテスト聖公会、フリーメソジスト等、年を追つて分離しつつある。この時に於いて若王寺山頭の草葉の蔭にひそかに耳を着けて、声なき声に耳をそばだてるならば、折柄吹きささぶ松嶺は「それ見たことか、我輩が言わんことではない」と言うお声さえ聞こえるであらう。

唯にそれのみか、植村先生の警告など物ともせず、小さな新島たとえば成瀬仁蔵、清水安三如きがぞくぞく輩出して、続々成功するのであるから、さしもの植村正久の予言もこの事実を如何ともすることができないのである。

然り而して植村は新島先生がその死後十有余年に至るも、なお尊崇する者の多きに驚歎しているが、先生死し給うすで七十有余年に及んでいるが、先生を尊崇する者はますますふえて今や、わが国の代表的クリスチャンと言へば、第一にその指を新島襄の名に折らぬ者ではないありきまである。まさに先生は自らの真価を後世の人士に問うていらつしやる次第である。

さて、この文章を擱くに当たつて、一言書き誌るして置きたいことは、彼のジャン・フレッドリッヒ・オペリン（米國オペリン大学及び東京桜美林学園の名称こそはこの人の姓より出でしもの）は、死するに当たつて自らの墓碑に、「わたしの名が忘れられて、主イエス・キリストの名のみが後世に伝わるように」と刻まれるよう遺言した。そしてその如く誌されている。わたくしは近江兄弟社に対して、いつもヴォーリーズ先生のことは能うだけ口にせず、すべてをイエス・キリストの名のために行なうようお頼みしている。あたかも、そのように同志社が新島先生を有することは無論同志社の他のいづれの学園にもうらやまれて止まぬことは事実である。わたくし如き新島先生のお亡くなりになった翌年に生まれた者ですらも同志社はわれを育てたり。而してわれの師匠は新島先生なるぞと甚だ勝手ながら考へて、大いに自負しているのではあるが、しかしながらそれにもかかわらず若王寺山上の新島先生の墓標には、目にて見えぬ筆跡にて、「余が名が忘れられ、基督の名のみがたたえられるように」と、海舟の筆ならで、新島先生ご自身の真筆で以つてはつきり書き誌るされているのではないかと考えられてならぬ。